



民主主義の意味を改めて考える

畠山 武道

最近のマスコミ報道の中で、面白かったのが、吉野川可動堰をめぐる住民投票に対する建設省（例の大臣を含む）やゼネコンの反応である。「住民投票は議会制民主主義の破壊だ」「バカばかり。感情だけで反対している」などの悪口雑言の中に、彼らの焦りがうかがえる。しかし、その中でも見逃すことができないのが、「安全の問題を投票で決めることはできない。やるものはやる」という建設省幹部の、一見、さめた姿勢である。本当に、安全の問題を投票で決めることはできないのか。

彼らの第一の言い分は、「河川の管理方法は技術基準で定まっており、住民の意思とは関係なく客観的に計算されたものである。投票で決まるものではない」というものである。しかし、これは嘘である。確かに、河川管理については、河川管理施設等構造令や河川砂防技術（案）などがあり、計算方法も定められている。しかし、計算式にはいろいろの種類があり、また最も重要な基本高水流量の算定についてさえ、さまざまな政策的考慮の余地があることは、すでに千歳川放水路問題で経験済みである。彼らは、自分で決めた基準や計算式を住民に押し付けているにすぎない。

そこで出てくる第二の言い分が、「災害が生じたら誰が責任をとるのだ。住民が責任をとるのか」という責任論である。しかし、これも嘘っぽい。というのは、建設省幹部が水害の責任をとった、などという話は一度も聞いたことがないからである。しかも、国は、多数の水害訴訟でも、自らの責任を認めようとはせず、「治水には財政的な制約がある。河川改修は段階的にやるしかない」などの主張をくり返している。しかし、金がないわけではなく、他方で、必要もないダムをせっせと作り続けているのである。

結局ところ、莫大な公費と時間をつかって150年に一度の大洪水に備えるか、50年に一度の洪水に備える程度の工事で我慢するかは、地域社会の事情、自然環境、経費などを考え、最終的には住民が判断すべきことである。徳島市の住民の多くは、巨大なコンクリートの可動堰よりは、多少災害のおそれは増しても、歴史的な遺産ともいべき今の堰の方がよいといっているのである。住民投票した人は、決して「感情的に行動しているバカな住民」ではない。自身の安全も考えたすえ、自らのことは自らで決めようとしている賢い人たちである。

アメリカの環境哲学者アルド・レオポルドは、有名なエッセイ「山の身になって考える」の中で、「過度の安全確保は、長い目でみると危険しか招かないように見える。それが野生の中に救いがあるというソローの格言の意味だ」と述べている。役人が過度に住民の安全に配慮することは、かえって住民の災害に対する警戒心を弱くする。「安全の問題を含めて、自分達で決める」ことの重要性を、今回の住民投票は教えている。そして、そうした姿勢（精神）こそが、「住民投票は議会制民主主義の破壊だ」という表層的な批判をはるかに乗り越えて、民主主義を奥深くで支えているのである。

はたけやま・たけみち

1944年旭川市生まれ。1989年から北海道大学教授。94年から本協会副会長。専攻は行政法学。「アメリカの環境保護法」「環境行政判例の総合的研究」（いずれも北大図書刊行会）などの著書がある。